

翻訳について

江 坂 哲 也

はじめに

このタイトルにある翻訳についての初体験はと振り返れば、中学校での英語の授業であろう。そこで ■I am a boy.■ が「私は一人の少年です」と教えられ、試験で ■You are girls.■ の訳を求められ、「あなたがたは少女たちです」と書いていた。be 動詞は主語によって変化すること、名詞に単数と複数の区別があること、そして主語 + 動詞 + 補語の順に並べることを教えられ、そういう文法というものを強調して訳すと、あのような結果になった。

これは外国語の文法を強調しすぎると、おかしい訳になることを示す例である。ところが少し前まで、「とにかく使える、話せる英語を」という声が高まり、逆に文法をおろそかにする傾向があった。これは文法的に正しく、たとえば初対面の挨拶「はじめまして」をジャパニーズ・イングリッシュで At the first time と訳しても、アメリカ人は誰も ■How do you do?■ とは解してくれない、そういう事態を防ぐためだったのかも知れない。辞書を引ながら文法にのっとったものを作文していたのでは、目の前の相手との交渉に支障をきたす。そういう弱点を超越しようと、マニュアル化された英会話が推奨されたのかも知れない。これが ■How are you?■ に対しては ■I am fine, thank you. How are you?■ と機械的に応える会話方式である。ところがそこから新しい問題が生じた。アメリカに留学した女子学生が風邪をひいて病院を訪れたとき、ドクターの ■How are you?■ (「どうされましたか」) という問いに、それに続く英文を教わったとおり機械的に繰り返したという。珍客の来院にその医師はいぶかしがりながらも、■I am fine, thank you.■ と応じ、その後どうなったのかは聞いていない。

"How do you do?■ にしても、■How are you?■ にしても、どちらも正しい文法にのっとったもので、それぞれの文が発声される状況での意味を伝えている。基本的な日常会話を身につけることは大切である。しかしマニュアルどおりに覚えて、イン・プットしたものを機械的にアウト・プットする会話では、単一ではない現実的状况をすべてカバーすることなどできないであろう。コンピュータなどの機械にできない創造的な会話を楽しむには、音声と文字を統括する文法を身につけることがどうしても必要となろう。英語と日本語、ドイツ語と英語など、異なった言

語間の通訳にしても翻訳にしても、必要不可欠なものはまず文法であろう。しかし、それは必要条件であって、十分条件はその言語で表現されている事柄に関する原理・原則であり、様々な知識となろう。政治や経済の話もあり、おとぎ話や神話、それらが混在したような『アラビア数学奇談』¹のような本もある。それらにはそれぞれ原理・原則があり、特に数学は実在するものを数などに抽象化して、それを独特の記号と規則で、つまり数学の文字と文法で表している。

翻訳に限らず、人がある事をする場合は、何らかの必要とか動機がある。それが本人の意思からではなく、生活のためいやいや始める仕事もあるだろうが、そのうちそこに面白みを発見し、ワクワク、ドキドキしながら日々を送り、その道の達人になる場合もあるだろう。その興奮と危機、驚きとか疑い、興味とか好奇心、こういう心情はコンピュータなどの機械にはない人間的なもので、これがまず先ほどの必要・十分条件に先行していなければならない。これがあれば、あの第一の条件は文法書や辞書で学習し、第二のものは百科事典やその他の書籍などから入手できるからである。

現在は文法書や辞書なども揃っているが、私たちの先人はこの人間的な感情しか持ち合わせていなかった。それだけで彼らは西洋の書物の翻訳に挑み、それを成し遂げ、後世に遺産として残してくれた。まず、その例から見てみよう。

江戸時代の翻訳

杉田玄白と前野良沢はドイツ人クルムス (Johann Adam Kulmus 1689-1734) の『解剖図譜』 („Anatomische Tabellen“) をオランダ語に訳した『ターヘル・アナトミア』 (Ontleedkundige Tafelen)² を見て、その人体解剖図が「^{ぞうふ}臓腑、^{こつせつ}骨節、これまで見聞きするところとは大いに異」³なるのに驚いた。西洋と東洋人では体内のものまで異なっているのかと、いぶかしく思い、その書を携えて処刑場があった「^{こつ}骨力原の^{はら}設け置き^{かんぞう}し観臓の場」⁴に確かめに行く。そこで見せられたものは、「携へて行きし和蘭図に照らし合せ見しに、一としてその図に^{いささか}聊か違ふ^{たが}ことなき品々なり。古来医経に説きたるところの、^{いきよう}肺の^{ろくようりようじ}六葉^{わか}兩耳、肺の左三葉右四葉などいへる分ちもなく、腸胃の位置形状も大いに古説と異なり」⁵と書いている。つまり彼らが学んできた権威ある医経の図と、臓腑をそれぞれ分割した「分ち」の実物は大いに異なっていたのに驚き、次に彼らがオランダの『解剖図譜』とは完全に一致していたことで再度驚かされたわけである。日本人も外国人も、人間として同じ内臓を備え、洋書の方が正確だったわけである。

この数行前にこういう面白い記述がある。「^{ろうと}老屠^{ふわけ}また曰く、只今まで^{それ}腑分^{これ}のたびにその医師がたに品々をさし示したれども、誰一人某は何、此は何々なりと疑われ候御方もなかりしといへり」。処刑者の死体解体に立ち会った医師たちは、誰一人として、実物の臓器に興味を示さず、目をそむけ、古来の医学書を信じ、弟子たちに誤りを伝えていたことになる。死体処理をする「屠」を士農工商の外に置き、身分差別していた制度、死体に対する宗教観、まさにそういう文化が誤った医学を温存させていたことになる。

杉田らは現物を正確に写しとった解剖図に驚き、その西洋の医学を学び、理解しようと、その『解剖図譜』を読もうとするが、その言葉が分からない。現物と照らし合わせることでできる long (ロング, 肺), maag (マージ, 胃) などの名詞は簡単であるが, zinnen (シンネン, 精神) という単語に出会い, 「一向に思慮の及びがたきことも多かりし」⁶ と書いている。オランダ語に通じた通司の体験談を聞き, 杉田らは当惑する。「飲む」という動詞をオランダ人に聞くため, 身振り手振りでようやく デリンキ (drink) と教えられるという具合で, 「あの辞を習ひて理解するといふは至って難きことなり」⁷ と, 外国語修得の困難を知らされ, 当惑しながらも, 西洋の精緻な解剖学を理解しようとする志を糧に障害を乗り越え, その翻訳を 1774 年 (安永 3) 『解体新書』と題して結実させる。

臓器などを表す名詞はその実物と照らし合わせれば簡単に分かる。通詞が難しい例として挙げていた動詞も, 身振り手振りで理解できよう。それより理解に苦しんだのは, 実体のない zinnen (シンネン, 精神)⁸ という名詞で, そして最難関は文中の単語と単語を関連づけている文法であったのだろう。そう思わせる記述を引用してみよう。「その頃はデ (de, 英語の of にあたる, 以下この順でオランダ語と斜体で英語を記す) の, ヘット (het, *it or the*) の, また アルス (als, *as*), ウエルケ (welke, *which*) 等の助語の類も, 何れが何やら心に落付きて弁へぬことゆゑ, 少しづつ記憶せし語ありても, 前後一向にわからぬことばかりなり」⁹。このように彼らは, 現在では前置詞, 定冠詞, 代名詞, 関係代名詞など色々な品詞に分けられるものを, その役割が分からないため「助語の類」と一括せざるをえない段階であるが, 原文を理解するためにはそれを解明し, それぞれの単語を統括する文法をマスターしなければならないと思い, 困り果てながらも努力した。この努力を支えたのは驚き, 疑問, 好奇心, そして理解したいという人間的心情であった。

この『解体新書』という成果の副産物として, 単語と意味などを書きとめたもの, つまり簡単な辞書や文法書のようなものが出来あがっていったであろう。そういう先人たちの努力の積み重ねが現在の種々な辞書や文法書となり, 私たちが外国語の文献を理解し, さらに文学作品などを享受するために必要なものとなっている。これらは先人からの遺産であり, それを受け継いだ私たちはそれにプラス・アルファして後世に手渡すべきで, そのためには先人が始めたときの人間的な心情を第一にして臨まなければならないだろう。つまり, その翻訳も辞書も未完成で, 欠陥があるのではという疑いを持って利用しなければならない。さもないと「医経」を信じた彼らの先輩たちと同様に, 受け継いだ辞書などをそのまま送るベルト・コンベアという機械に墮することになる。それを防いでくれるのは, 自分の頭で理解しながら読むということであろう。そこには勝手読みという落とし穴もあるが, 「人間は努力するかぎり, 過ちを犯すものだ」¹⁰ で, その誤解という失敗は, 何も考えず字面をながめ暗記するだけよりずっと人間的で, いつか正解という成功の母となるものだ。この「疑い」を心にしながら, つまり自分の頭で考えながら読むことの大切さ, この具体例を次の項で展開したい。

経済学批判の誤訳？

名古屋の枀中に大学があったころ、ある教授にこう尋ねられた。「ゼミでマルクスの『経済学批判』を扱っているんだが、ある学生がその序文の結びで、『マルクスは経済学を学ぶ者に疑問を持ってはいけないと言っているのか』と質問された。それは確かにおかしいと思い、その原語を辞書で調べても、それらしい意味ばかりだが、どういうものだろうか」。学生の質問も、教授の受け止め方も実に自然で、人間的だ。後にブランド教授 (Prof. Helmut Brandt 23. 02. 1928-12. 08. 2006) と話していたとき、「マルクスのは科学か、批判かという問題があるが……」と言われたとき、この枀中でのことを思い出した。当時の DDR (Deutsche Demokratische Republik の頭文字を取った略号、正しい訳は「ドイツ民主共和国」で、日本では「東ドイツ」が通称) で、ある学生が私にそと「マルクスなどが引用され、彼をそれで称えるだけで終わる論文が多い」と嘆いたように、「批判」ではなく、「科学」として神聖化されていたようだ。マルクスはそれまでの経済学を「批判」する本を遺したが、それが DDR では批判ではなく、信仰の対象となっていたのだろう。批判を許さない体制は人間の自然な感性を抑圧し、創造性を失わせ、空気までも重苦しくする。

閑話休題として、あの「疑い」の箇所とその直前の一文を原文で引用し、次に訳を添えよう。(後述の便宜上、ダンテの詩行で問題となる二つ単語に下線を加える)。

Bei dem Eingang in die Wissenschaft aber, wie beim Eingang in die Hölle, muß die Forderung gestellt werden:

Qui si convien lasciare ogni sospetto

Ogni viltà convien che qui sia morta¹¹.

この学問に (読者が) 入る際には、地獄に入るのと同じように、こう要求したい。(この文は引用者訳)

ここにいっさいの疑いを捨てなければならぬ

いっさいの怯情はここに死ぬがよい¹².

ダンテの『神曲』は地獄から煉獄をとおり、天国に至る叙事詩である。そこに行き着くためにはまず地獄から入らなければならず、その門の頂上に書かれている言葉が先ほど引用したものである。マルクスはこの経済学を学ぼうとする者にその同じ言葉をささげ、序文を結んでいる。もちろんマルクスは唯物論者だから、目的界は天国ではなく、明るい高きところ¹³であろう。そのダンテの言葉はイタリア語で書かれているが、このディーツ版の原著では同頁の下欄にドイツ語訳でこうある。

Hier mußt du allen Zweifelmüt ertöten,
Hier ziemt sich keine Zagheit fürderhin. (Dante, „Göttliche Komödie“.)

上に引用した国民文庫版の訳はどのような種類の「疑い」かと注をつければ、このドイツ語訳とほぼ同じと言ってよいだろう。当時私はこのドイツ語訳を見せていただき、こう答えたと思う。問題の ›Zweifelmüt‹ は ›Zweifel‹ と ›Müt‹ (気分) の合成語で、前者の ›Zwei‹ は「2」という意味だから、地獄の門を前にして「入ろうか、戻ろうか」などと躊躇する二つの気持ちを表し、「この本を前にして『読み始めようか、積ん読にしようか』と迷うことはやめなさい、『難しそうだから……』などと臆病 (›Zagheit‹) にならず、さあ本文に進みなさい」、そうマルクスは書いています。確認のためヴァーリッヒで ›Zweifel‹ を確かめると、›zwiefältiger Sinn‹ (二重の心) という記述はあったが、›Zweifelmüt‹ という見出し語はなかった。今回あらためて他の辞書を調べてみたところ、『ドゥーデン』(Duden „Deutsches Universalwörterbuch“ 1989 u. 2001) にも、『マッケンゼン』(Mackensen „Deutsches Wörterbuch“ 1977) にもなかったが、全 32 巻の『グリム』(Grimm „Deutsches Wörterbuch“ B. 32. S. 1018.) で、ようやくそれを見つけることができた。その第 2 項で「不決断 (unentschlossenheit), 揺れ動いていること (schwanken)」と、私が推測したものと同じ意味が載っている。こうして見ると、マルクスの時代ではこの単語が少なくともダンテのドイツ語訳としては生きていて、彼はその訳本からこの 2 詩業を採って、注をつけたのであろうか¹⁴。ちなみに 1951 年のレクラム (Reclam) とヴァイヒェルト (Weichert) 版の訳を掲げてみよう。

„Hier muß man jeden Argwohn von sich lassen,
Und jede Feigheit muß des Todes sterben¹⁵.”

Hier muß man jedes Zweifels sich entschlagen
und jede Feigheit hier ertötet werden¹⁶.

前者訳の ›Argwohn‹ はヴァーリッヒの辞書では ›arg + Wahn‹ (「悪い」 + 「妄想」) が原義であると説明されているから、地獄への門の前で「中に入れば、良くないことが待ち受けているのではないだろうか」と妄想を抱き、入るのを躊躇することで、先述の内容と同じことになる。後者訳の ›Zweifels‹ は 2 格を表す ›s‹ を取れば、›Zweifel‹ となり、先述および注 14 のとおりである。2 詩行目の ›Feigheit‹ は両者訳とも同じで、これはマルクスの引用した ›Zagheit‹ とは違うが、それが雅語であるため、現代的な訳語に替えただけで、同じような意味、「臆病」である。

あの当時のゼミ・テキストがこの国民文庫版のものであったか、どうか分からないので、慎重を期すため、今回他の日本語訳を青木文庫と新潮社のもので当たってみた。

ここにいっさいの疑懼を棄てなければならぬ。

いっさいの怯懦がここに死なねばならぬ¹⁷。

いっさいの狐疑をここにすてよ、

あらゆる怯懦はここに滅びよ¹⁸。

あの「疑い」が前者では「疑懼」（「うたがいおそれること」¹⁹）、後者では「狐疑」（「狐は非常に疑い深い動物である」というところから、狐の疑い」²⁰）で、あの学生の質問を誘発する誤訳といえよう。2 詩行目の問題の単語訳は国民文庫では「怯情」（「おくびょうで、なまけ者である」²¹）であるが、他の二つの訳は「怯懦」（「臆病で意志が弱いこと、おじおそれること」²²）で同じである。二つの訳語「怯情」と「怯懦」の読みは「きょうだ」で同じになるが、マルクスが使った >Zagheit< の元になっている動詞 >zagen< は、ヴァーリッヒでは >ängstlich, schüchtern zögern<（臆病で、尻込みがちで躊躇する）という意味までしかないの、国民文庫版の「情」の「なまけ者である」ことまでやめるよう彼は要求していないであろう。彼によれば、そういう者は支配階級がニートで、後者はその社会体制が産み出したもので、前者ほど罪深くないということであろうか。

このようにドイツ語も含めた色々な翻訳を見てみると、ダンテの同じ >sospetto< と >>viltà< が時代と翻訳者によって様々であることが分かる。30 年ほど前に使われていた相良守峯編²³とシンチンゲル²⁴の辞書を見ると、前者には >Zweifelmüt<「疑いがちな性質、狐疑心、不決断」とあるが、後者にはその見出し語そのものが載っていない。前述したように、この単語は二語の合成であるから、>Zweifel< で見てみよう。前者では「疑い、疑念、疑惑；疑問、狐疑、逡巡、不決断、迷い、懷疑」とあり、後者では「疑い、疑念、疑惑、懷疑；あいまいさ（確信のもてない）」とある。前者の「不決断」がこのコンテキストでは当てはまるといえようが、これに当てはまる適当な用例はどちらにも載っていない。こうして見ると、当時としては独和辞典に当たるしかなかったと言えよう。では現在のではどうかと、郁文堂の『独和辞典』を見ると、>Zweifel< の見出し語で、原義が >(Ungewißheit bei) zweifach(er Möglichkeit)<（「二つの《可能性間での不確かさ》——引用者訳）とドイツ語で説明され、動詞 >zweifeln< では「er zweifelt, ob er der Einladung folgen soll 彼はその招待に応じてよいものかどうか迷っている」と、二つの可能性間での不決断を表している適例を載せている。こうして見ると、30 年間で独和辞典はこれだけ改善されたことになる。

以上で、これは学生の素朴な疑問が先輩たちの不正確な翻訳を発見する端緒になったという例であるが、自分の頭で考えながら文脈にしたがって読み、訳本で疑問を感じたら原文を参照すること、これが大切である。

以下のものは前述とは逆に、翻訳の元になっていたものを先に読み、その誤訳を発見した例である。原著を読めば翻訳は読まないのが普通であるが、このまれな例はこういう事情から生まれ

た。ドイツで偶然一冊の本, „Sofies Welt“ (『ソフィーの世界』) を購入し, 読んだ。その後これが日本で翻訳され, ベスト・セラーの一つになっていると聞き, 「どうして少女の誕生祝として書かれた西洋哲学史がそうなるのか」と不思議に思ったが, それが百万部を越えたと知った春, 「それなら, 1 年生向けのゼミでも難しくないだろう」と思い, これを読了した学生がどれほどいるか調べたところ, 25 人中で手を上げたのが女子学生一人だけであったので, テキストに決め, 私もその翻訳書を購入し, 学生と共に読み出した。そして, 「神話が描く世界像」という項で問題の箇所²⁵に到達した。

雷が鳴り稲妻が走ると, 雨も降る。ヴァイキング時代の農民にとって, 雨は生きていく上で欠かせない, 大切なものだった。それでトールはおそろべき神として敬われたのです²⁵。
(下線 ― 引用者)

私はドイツ語版ですでに読んでいたため, 下線部はおかしいと気づいた。この翻訳者は「あとがき」でこう書いている。「最初に池田が, 主にドイツ語版によって訳しましたが, 英米の二種の英語版も参考にし, より簡潔でわかりやすいと判断したところは採用しました。版によってかなり個性が異なるのです。ノルウェイ語版も参照しました」²⁶。この最初の記述から, 私は原著のノルウェイ語版はもちろん, 英米の二種の版も見えていないが, この誤訳の原因は推察できた。この日本語訳は全体としてこなれ, 分かりやすく, スラスラ読める良いもので, それゆえドイツ語訳で読んでいなかったら, この箇所に疑問を感じなかったかもしれない。この前にはトール神が二頭の雄山羊に曳かせた車に乗って空を歩き, 彼が槌を振ると雷と稲妻が走るという記述があり, さらに誰でもピカッと光りドーンと来れば恐ろしく思うため, それゆえこの「おそろしい神」という誤訳に気づかず, 読み通していたであろう。ところが下線部のドイツ語は >Fruchtbarkeitsgott<²⁷ (「豊かな実りをもたらす神」) で, たぶん急ぎの翻訳のため, >Frucht< (果実) をよく似ているスベルの >Furcht< (恐れ) と見違えたのだろう。

そこで改めてあの本文を読み返すと, 「生きていく上で欠かせない, 大切な」雨を降らせてくれる神は恐ろしく感ずるのではなく, ありがたく思い「称える」のではないか, そして恐ろしい神は「敬う」というより, 怒りを静めたまえと「畏む」のではないかという疑問が生じてこよう。こうして見ると, 雨が降り, 喜んでいる農民たちの情景を自分の頭で想像しながら読んでいくということの大切さが改めて再確認されよう。

独和辞典が 30 年前と比べ改善されていることは前述したが, それは旧辞書使用者からの苦情や指摘を新しい編者が採り入れた成果でもあろう。それゆえ先人の仕事の利用者や読者はこうした遺産の享受者であるとともに, それを改良し次世代に手渡す役も担っているといえよう。当時そんな大袈裟なことは考えもしなかったが, 学生に「出版社に手紙を書いたら」と挑発したが, 誰もそうしようと言いだす者はなかった。もちろん私も本職のほうが忙しかったため, さらに誤訳など誰もができるものであるため, 他人のそれを一々詮索するのは如何なものかという心理が働

いためそうしなかった。

理解のための基本とは？

自分の頭で想像し、考え、理解しながら読むこと、これは翻訳ばかりでなく、すべての学問に必要なことであろう。想像する場合は具体的なものや状況を思い浮かべるが、考えたり理解するときには言語に頼ることになる。それなくして人間は考え、意見を戦わせ、自分とは違う相手を理解することなどできない。ここで少し寄り道をして、最も抽象化されたといえる数学を例にして、想像する場合の具体的なものと、思考する場合の抽象的概念との関係について述べてみたい。

2003 年 OECD が実施した国際的な学習到達度調査結果によれば、日本の 15 歳の少年・少女の数学的リテラシー（応用力）はその前年の 1 から 6 に順位を下げた。この結果が新聞紙上でも大きく取り上げられ、波紋を広げ、政府・文科省は「ゆとり教育」を放棄し、全国学力テスト実施の方向に歩みだした²⁸。図形やグラフの応用問題のできが悪かったようだが、これは国語・読解力が 8 から 14 位に落ちたことと関係しているように思われる。計算式を早くたくさん正確に解く練習の前に、具体的なものを抽象的に考える数学の基礎を身につける方が重要であろう。例えば、割り算と掛け算の関係、そして分数の基本を具体例で理解させずに、分数の割り算を「ひっくり返して、掛けろ」とテクニックを伝授しても、人間を計算機に貶めるだけであろう。ここでこの具体と抽象の具体例を挙げてみよう。

4 人家族の太郎のお父さんが誕生日にケーキを買ってきた。お母さんが包丁で 4 つに切り分けたが、同じ大きさにはならない。そのため山下家では、じゃんけんで勝ったものから順番に取るようになっていた。一年に数回しか味わえないケーキだから、お姉さんの花子も太郎も一番大きいのはどれかと、眼をこらして観察していた。ところがじゃんけんの結果はみじめなもので、太郎は最後になった。お姉ちゃんが一番に取ったケーキの大きさと較べると、太郎の分け前はいかにも小さく見え、なぜか目に涙が浮かんできた。ところが次のお母さんは残っている 3 つの一番小さいものを、お父さんはその次に小さい方を取った。両親がなぜそうしたかは、子どもの太郎に理解できるはずもなく、とにかく二番目に大きなケーキが手にできて、せめてもの幸せを噛みしめながら食べた。

翌日、太郎の通う小学校の算数の時間に事件が起こった。黒板に先生がお皿に載ったケーキの絵を描き始めた。そのケーキは丸い 1 つの大きなものを 4 つに分けたものに似ていて、先生の絵も同じ大きさではなかった。太郎の目には昨晚の光景がまざまざと浮かび上がり、大きさはそれぞれ違うことを見逃さなかった。最初の 1 皿と次の 3 皿を少し離れた絵を描き終わった先生は、「ここにケーキがあります。1 つと 3 つをたすと、いくつになるでしょう」と聞いた。（次頁の図 1 を参照のこと）

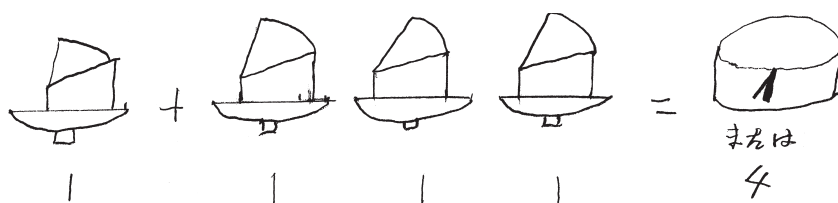


図1

太郎は手を挙げ、「1 つになります」と答えた。教室中が笑いの渦に巻き込まれ、机を叩いて面白がっている者もいる。そういう場で、先生はどう言うべきか。「太郎ちゃんはまだ習っていない分数計算 ($1/4 + 3 \times 1/4 = 1$) で答えたのね」とほめても駄目である。この場合はケーキの大きさに関係なく、1 皿のものは1 つと頭のなかで抽象化すること、これを分かせなければならぬ。お父さん、お母さん、花子と太郎のように身長が違って、それぞれ同じ1 人と考えること、これと4 人を同じ1 家族とすることは違うことを、理解させることが重要である。

数学は言語に似ていると前述したが、どちらもそれぞれの文法・原則で成り立っている。これを混同すると、とんでもないことになる。この例を工学部の学生を教えた経験から引いてみたい。理系の学生は数学に強いが語学に弱い、そして文系はその逆とよく言われ、それはそれで良いという誤った風潮に彼らも身をまかせていたようだ。つまり、彼らはドイツ語の勉強にあまり熱心ではなかった。それで授業を中断して、「数学だけで間に合うと考えていると大間違いで、そんな考えでは自分が設計し、製造した製品の説明書を購入者に分かる正しい日本語とか外国語で説明できない。正しい言語活動ができない者はそもそも小学校の算数さえ理解できていないのだ」と言って、黒板に図を書きながら、こう始めた。(下図2 参照のこと)

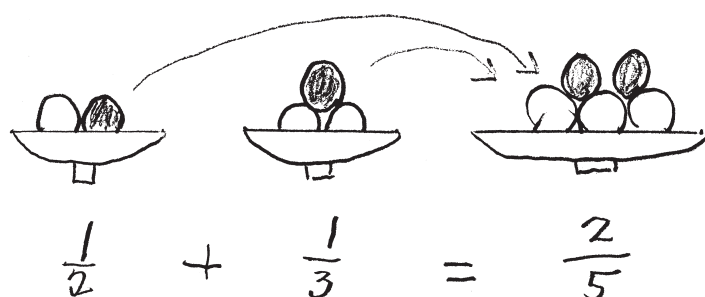


図2

「お皿の上にリンゴが2 つ載っています。1 つは赤いリンゴ、もう1 つは青いリンゴです。赤いリンゴは2 つのうちの1 つだから2 分の1 の割合でそこにある、そう言えますね」。そして、その皿とリンゴの図の下に2 分の1 と分数で書く。先生は何を始めたのかと思ひながらも学生は肯く。「次の皿にはリンゴが3 つ載っています。1 つは赤いリンゴ、他の2 つは青いリンゴです。

すると同じように、このお皿では赤いリンゴは3分の1となりますね」と、同じように図の下にその分数を書く。先生は小学校の算数を教えたいのだと納得しながらも、ドイツ語の授業でなぜ数学なのかと不思議に思いながらも、耳を澄ませている。「大きなお皿を持ってきて、その2皿のリンゴを合わせて載せると、赤いリンゴは5分の2となりますね」と、同じように図を描き、その下にその分数を書くと、学生は同じように頭を縦に振る。それを確かめたうえで、最初の2つの分数の間に $< + >$ 記号を書き、続いて次の2つの分数の間に $< = >$ と等号を引き、「これで $1/2 + 1/3 = 2/5$ となることが証明されたこととなりますね」という。すると教室中がしばらくシーンとなるが、ある学生が「先生、 $1/2 + 1/3 = 2/5$ ではなく、 $5/6$ です」と答えたのを受け、「ぼくも小学校でそう習ったが、いま君たちの目の前で、 $2/5$ になることを証明したではないか」。それで学生の反応を待っていると、他の学生が興奮して、「そうだ、先生の言うとおりだ」と言う。それを切っ掛けに教室中が騒然となり、学生たちはお互いに議論を始める。彼らは有名国立大の学生だけあって、シーンから始まってケンケン・ガクガクとなる反応を示してくれた。

さて、その騒然たる事態が収まらないということは、数学と言語の原則を混同している証拠である。それを明らかにするため、「いいかい、君たちは二つの違った原則をごちゃ混ぜにしているんだ。それぞれのお皿に赤いリンゴがそれぞれの割合で載っていること、そして小さい二皿を大きな皿に合わせて載せたこと、これと分数の足し算は別のことで、その二つの原則を混同するから分からなくなるんだ。 $< + >$ と $< = >$ の記号は $< 合わせて載せた >$ という言語には当てはまるが、下の割合を表す分数には当てはまらないんだ。《比とか割合は四則計算できない》という数学の原則を君たちは忘れていたんだ。言語と数学は別の文法で成り立っているんだ」。これで騒然としていた教室が再びシーンとなる。この静かさの意味は、「そう言えば、そんなこと習ったが、忘れていた」とか、「そんなこと今まで習わなかった」という、自分への反省と悔恨の念がそうさせているのであろう。「君たちが卒業後、会社に入り、ドイツの製品よりもっと良いものを造ろうと、それを取り寄せ、その使用説明書を読むことになったとき、日本語と誤って混同しないように、ぼくはドイツ語を教えているんだ。そのドイツ語の原理原則をマスターすると、いま証明したように、数学も英語もよく分かり、日本語にも磨きがかかるようになるから」と終え、本来の授業にもどった。もちろん学生はそれで襟を正し、耳を傾けるようになった。

学問はそれぞれの原理原則に従って理解すること、英文はイングリッシュの、ドイツ文はドイツ語の文法に従って素直に読み書き、聞き話すこと、つまり母語も含め各々の言語を相対化する能力を身につけること、これが大切である。翻訳に際してももちろん、その相対化能力である素直さが大切である。

木と森、または文法について

翻訳の際には文を構成している単語の意味をまず知っていなければならない。これは当たり前

のことであるが、これが強調されすぎると、それぞれの言語の文法から離れ、辞書を引き意味を調べているうちに、うっかり「木を見て、森を見ない」という結果になる。この単語は、音声にしても文字にしても、それぞれアト・ランダムではなく整然と配置され、必要に応じて変化させられるが、そうさせているのは話者や作者の文体という個性とその状況にふさわしい感情であり、そして文法である。その文法はそれぞれの木の種類を、さらにその形を決め、あるべき所に生えさせ、森を造っている自然の法則のようなものである。この一文という小森がさらに段落、節さらに章という大森を、そしてそれらがさらに作品という大きな世界を作り上げている。このようにして世界は成りたっていることを理解しなければ、その美しさも楽しめない。それゆえ、その作品という世界に感動して初めて、それらの部分であった文章も自分の頭で理解できたといえよう。

ところが、例えば試験などでの実際の行動となると、この当たり前のことが忘れられ、文の意味が分からないのはいつものことで、とにかく運を天にまかせて適当に書きなぐり、そして部分点に期待をたくすか、またはあきらめて解答欄を空白のままにしておくことになる。文法にのっとり、理解しながら読んでいくということの大切さを忘れていたことは反省せず、「辞書さえあれば、こんな惨めなことにはならなかっただろうに」という悔恨にさいなまれ、できるだけ多くの単語の意味を盲滅法に覚えようとする。ところが、持ち込み可という条件で、ドイツ語文法を終えたクラスで試験をすると、この当たり前のことが分かっていないことが実証される。辞書も文法の教科書も、さらに参考書まで「持ち込み可」であるのに、結果は惨めなものとなる受験生が多い。文法が全く分かっていない、またはその文にどの文法事項を当てはめれば良いのか分からず、自分でも理解できない和訳の結果を目の前にし、自分の辞書に載っていない何か特殊な意味があるのだらうと勘違いするか、「ドイツ語とは難しいものだ」と、ため息をつく。

ここで二つの例を挙げてみよう。一つは英語の入学試験の採点をしていた 1982 年のことで、どうしてこんなにも訳のわからない訳になるのかと不思議に思い、その原文を見て、文法に沿って読まなかったことから起こった誤訳ということで納得できた。その問題文の前には、「子どもにとって最大の恐怖は両親に愛されていない、捨てられているということで、そう感じると、その報復のため猫を蹴とばすなど、とんでもないことをするようになる。学校から帰って、お母さんがいないと、恐怖を感じる子どもたちもいるから、どこに出かけているかをメモとかテープなどに残しておく」という内容が 20 行ほどの英文で書かれ、そして和訳が要求されている次の文が続く。《The parents' calm voice and loving words enable them to bear temporary partings without excessive anxiety.》(拙訳「その(テープから流れる)両親のおだやかな声と愛情のこもった言葉で、彼ら(幼い子どもたち)は不安を募らせることもなく、一時的な別れに耐えることができる」)。

解答欄に書かれていた日本語は、この英文が訳されたとはとても思えないものであったが、そのような誤訳を引き起こした最大のものは下線部の〈bear〉であった。原文では〈enable them to bear〉(彼らが耐えることができるようにする)という熟語の、〈to〉に支配されている動詞

の原形である。ところが受験生はそれを名詞の〈bear〉(熊)で訳したので、当然文意が正解とはほど遠い無茶苦茶なものになっていた。これなどは「英単語の意味を、とにかく多く覚える」という外国語学習の誤った方法を身につけてしまった被害者の例である。辞書を引けば、その単語には複数の品詞や意味がある。この問題文は 16 の単語からなっているが、それをコンテキストや文法を無視して、覚えた訳語を当てはめていけば、数学的にどれほど多くの組み合わせができるのか、そして正解の確率がどれほどのものになるかは一目瞭然であろう。単語を覚えるのは重要であるが、英単語なら英文法にのっとって覚えなければ、とんでもない低い確率に自分の将来をゆだねることになる。

次の例はドイツ文である。》Jungen bleiben Jungen, und kaum, wenn.....《最初の 3 つの単語の文は「男の子は男の子のままである」という簡単なものである。最後の〉wenn〈は従属の接続詞で、その次に続く文は省いたが、その大体の意味は「男の子が女の子をみくびったり、面倒な状況を作りだすのを防ぐために何も手を打たないと」である。問題となるのは〉und〈(そして)と〉kaum〈(ほとんど~ない)である。これらは基本的単語で、初級で習うものであるが、「そして、ほとんど~ない」と直訳してみても、前後の繋がりから見ても、それこそ「ほとんど意味を成さない」。そこで何か知らない熟語があるのではと思い、辞書でそれを探さことになる。これも、分らないと単語や熟語を知らないからだと思いこむ例である。もちろん、そういう場合もあるが、ここで基本原則に返ってみれば、実に簡単なことで、〉und〈は英語の〈and〉と同じで、等しいものを結ぶ等位の接続詞である。たとえば〉A und B〈, 〉Goethe und Schiller〈(「ゲーテとシラー」、名詞と名詞)、または〉in Japan und in Amerika〈(「日本とアメリカで」、両者とも前置詞句)、》Er hat Geld, und sie hat Liebe.《(「彼はお金を持っている、そして彼女は愛を持っている」、文と文)で、〉und〈で結ばれる前後のものは等位である。この文法原則から考えれば、A に当たるものは》Jungen bleiben Jungen《である。B に当たるものは〉kaum〈しかないが、同語反復を嫌うという万国共通の言語原則から省かれているだけで、それをもとに戻せば、》Jungen bleiben kaum Jungen《(「男の子はほとんど男の子のままでいられなくなる」となり、この訳文に先訳したあの従属文が続くことになる。これでもう全体を繰り返し訳さなくても明らかで、この文章全体は男女共学から生まれる弊害対策の必要性を表している。

ところで〈bear〉にしても、〉und〈にしても、その一つひとつを取り出せば、実に簡単なものであるが、文を読んでいくなかで、それが出てくると、つい「熊」とか「そして」と日本語訳を当てはめ、〈to〉の次には名詞だけでなく、動詞の原形が続く場合もあるとか、〉und〈は等位のものをつなぐ接続詞であることを忘れがちである。つまりその原語の文法で読んでいないのである。

翻訳の際にはその文が表している状況を想像しながら進めること、そしてその内容がおかしかったら、単語のスペルや品詞を間違えていないか、文法原則の何かを見落としていないかと素直に、初心に帰ることが大切である。これをいい加減にすると、とんでもない誤訳になること間違いな

しである。

正しく訳しても、誤り？

原文と日本語の文法に従って正しく訳しても、間違う場合がある。その例の前に、まずシラー (Friedrich Schiller 1759-1805) の『オルレアンの乙女』 („Die Jungfrau von Orleans“ 1801) からその原文を引用してみよう。

Mit der Dummheit kämpfen Götter selbst vergebens²⁹. (下線は引用者)

下線部の ›mit‹ は ›Er geht mit ihr‹ (彼は彼女と行く) の「と」同じ前置詞で、直訳すれば「神々でさえ馬鹿と戦っても無駄だ」となる。これを改良するためには、「馬鹿と」にあたる ›Mit der Dummheit‹ が強調のため前に置かれていることを考慮し、さらに「無駄だ」にあたる結果を表す副詞 ›vergebens‹ も文学的に訳す工夫が必要である。「馬鹿と戦えば、神々でも敗走となる」、これで良くなり、正しく分かりやすい日本語になっているようだが、とんでもない誤訳である。訳している当人には原文が頭にあるため、訳した日本語をその原文で読んでしまい、それに気づかない。この説明を分かりやすくするため、例を二つ作ってみよう。

日本は第一次世界大戦で英国と戦った。

日本は第二次世界大戦で英国と戦った。

ここでの問題は下線部にあるが、日本人ならその両大戦を歴史で習っているので、その「一」と「二」の違いから、同じその「と」が全く逆の意味であることが理解できよう。最初の「と」は、日英同盟を口実に参戦し、英国の敵ドイツが持っていた中国山東省の利権を奪った大戦であるため、その助詞は「～と同盟して、～と組んで」を表すが、次の「と」は日独伊の三国同盟と米中英など連合国との戦いであるため、「～を敵にして」となる。

日本語の「と」にはこのように正反対の意味があるのだが、ドイツ語の前置詞 ›mit‹ は前者の意味しかなく、後者には ›gegen‹ を使う。日本語には両者の意味があるといっても、「太郎は次郎と戦う」という文を読めば、誰でも後者の意味で取るのではないだろうか。では、あの韻文はこれまでの出版物でどう翻訳されているだろうか。

愚か者とあらそえば、神々さえ兜をぬぐ³⁰。

この訳の「と」では、先述したように、同じ誤解を招こう。「兜を脱ぐ」は「脱帽する」との関係で理解されることを期待してのことであろうが、「勝って、兜の緒を締めよ」という言葉が

あるため、「馬鹿が相手では、途中であほらしくなり、兜の緒を緩めて、ぬぐ」と解される恐れなきにしもあらずであろう。

人間の馬鹿さ相手では、神々といえどもお手上げだ³¹。

この訳でも、「馬鹿を（同盟の）相手として戦う」と、（ ）内を補って読む日本人はいないであろう。ところで、先に挙げた「～と組んで戦う」という日本語がいつもドイツ語の ›mit jm. kämpfen‹ となるかということ、例えば小兵力士と当たることになった弟子に、親方が「組んで戦え」と助言すれば、「がっぷり四つになって相撲をとれ」という意味で、これは逆に ›gegen jn. kämpfen‹ となる。このシラーの言葉についてブラント教授と話していたとき、「ドイツ人も多くが原文の ›mit‹ ではなく ›gegen‹ と逆に取って、それでシラーの言葉だと思っているよ」と教えられ、自分の馬鹿は省みず、相手のそれに文句をつけるのが万国共通で、人間のエゴがなせる業かと考えさせられた。さて以上はちょっとした寄り道であるが、和訳と独訳のどちらにしても、機械的に文法を当てはめれば良いというものではなく、原文を忘れて日本人に戻った一週間後ぐらいに、もう一度読み返してみる必要があるという例である。

では、あの問題の韻文に再度戻るとして、そもそもこれはイギリスがわの大將タルボット (Tarbot, 英語読みではトールバット) が、ジャンヌ・ダルク (Jeanne d'Arc, フランス語読みではジャン・ダルク) の率いるフランス王シャルル 7 世の軍隊に敗れ、致命傷を負い、これまでの自分の愚かさを自嘲する台詞である。「馬鹿な (Unsinn), おまえが勝って、おれが減びなければならないとは」で始まり、これに続くあの文をこう訳したらどうだろうか、「こんな馬鹿がわにつけば、神々でも負け戦となるわ」。しかし、これは舞台上で演じられる戯曲で、時間の制限があるのに、13 音節の原文にたいして、この拙訳は 26 文字にもなってしまう。蜷川演出の日本語版『オイディプス王』がギリシアで上演されたものをテレビで見たとき、私は俳優の台詞の速さについていけず、しっかり聞き取ることができなかったが、それは同時通訳で観客にイヤァ・ホーンから流されるギリシア語のスピードに合わせたからであろうか。そこで、あれを「馬鹿と組めば、神でも負ける」と訳せば、ちょうど 13 文字になるが、›kämpfen‹ を表す「いくさ」は消えうせる。「神々」は古代ギリシア・ローマの複数神を表すが、「神」では一神教のイエス・キリストと取られる恐れが生じよう。さらに話者の自嘲の念も弱まり、文学的面白みを無くしてしまう。こうなると、翻訳とは難しいものだと思う。

次に「健全なる精神は、健全なる肉体に宿る」というユヴェナーリス (Decimus Iunius Iuvenalis 60-140 年頃) の言葉を見てみよう。これを中学の国語の教科書で読んだとき、病弱ではないにしても背丈は小さいほうで 1, 2 をあらしめていた私は、「大きくて壮健な同級生より、健全な精神が宿っていないんだ」と、悲しく思った記憶がある。そして書店で『ポピュラーな間違い辞典』(„Lexikon der populären Irrtümer“ 1996.)³² というタイトルに惹かれ、立ち読みを始めると、まもなくその言葉が顔をだし、「あほう、おまえも騙されたのか」と私をあざけた。

あの言葉は一部が削られていたものであって、全体ではなかったのだ。次の引用はその原文と拙訳であるが、省略されていた部分は（ ）で示す。

„(Orandum est ut sit) Mens sana in corpore sano“³³ (ラテン語の原文)

「(願わくは,) 健全な肉体に健全な精神があ(つたら、ということであ)る」

〈orandum〉は〈oro〉(願う)の動名詞で、〈sit〉は〈sum〉(～がある)の接続法だから、「健全なる精神は、健全なる肉体にある」ということが「あつたら」という「願い」でしかない。このように省略されたものをもとに戻せば、あの言葉は健全な肉体への「賛歌ではなく、堅強な肉体への崇拜を攻撃するもので、それをユヴェナールは心底から嫌い、あの言葉で嘲笑したのであった。ローマ時代の油を塗りたくった筋肉の剣闘士を評したこの言葉は、現代の日常語に直せば、こうなる。『ああ、この筋肉猿どもに少しでも考える能力があつたら、なんと素晴らしいことであろうか』と。ところが、この言葉はしばしば「健全なる肉体に健全なる精神は宿る」(《In einem gesunden Körper wohnt ein gesunder Geist.》)と翻訳され、いかにもドイツ人らしい (teutonisch) 教練軍曹が入営前の生徒たちを訓練で痛めつけるライセンスとして何代にもわたって使われてきた³⁴。このような成立史をあの言葉は隠していたのだ。これはもう誤訳どころか、曲解、歪曲の類である。

〈Muskelaffen〉を「筋肉猿ども」と訳したが、これは「筋骨は隆々だが、脳は猿なみ」という意味である。ラテン語の原文の「ある」(sit)がドイツ語では微妙に変えられ「宿る」(wohnt)となっていてところを見ると、これが日本に直輸入され、「健全なる精神は、健全なる肉体に宿る」となったのであろう。そして日本でも軍事教練のライセンスとして使われ(?)、平和憲法下の中学校国語教科書のなかで生き残り、私の幼心を痛めつけたことになる。部分が全体から引き離され、一人歩きすると、とんでもないことになる例である。もちろん病気を治し、心が晴ればれとなれば、健全な肉体に健全な精神が宿ることになるだろうが、ただこの言葉を使う場を違えたり、ユヴェナールのものとして引用すれば、文法的にいくら正しくても、誤りとなる。そもそもユダヤ人を虐殺・「処理」したり、他国を侵略する精神を健全とは言えないだろう。

「人生は短く、芸術は長し」、この言葉も中学校国語の教科書で目にし、人間は永く生きられないが、創られた芸術作品はいつまでも残る」と解し、「それほど健全なる肉体の持ち主でない自分は、芸術作品などももちろん残せず、早死にするだろう」と悲しんだ。どうも私の解釈にはペシミスティッシュな傾向があるようだが、当時はそれが正しい翻訳だと思っていた。その後ゲーテの『ファウスト』(„Faust“ 1832.)を読んだとき、この言葉に再びお目にかかった。

その言葉が出てくるコンテキストはこうである。助手ヴァーグナがファウストの指導を仰ぎうと訪ねてくると、部屋の中から声が聞こえ、それでギリシア悲劇の朗読でもされているのだらうと思い込み、「この技術 (Kunst) でいくらか利益を得たいものです」(524 詩行、以下同)、「どうしたら世間の人々を説き伏せ (Überredung) て、操縦することができるでしょうか」(533)

と、金儲けのために弁論「術」をマスターしたいという。これにたいしてファウストは「悟性とほんとうの心があれば技術 (Kunst) などなくとも、おのずから言葉はでてくるものだ」(551) とたしなめる。彼はその言葉 ›Kunst‹ をとらえ、原典であるラテン語の《vita brevis, ars longa》(人生は短く、術は長し)を知っていることを披露し、名誉挽回をはかろうと、ドイツ語訳で《die Kunst ist lang, und kurz ist unser Leben》と³⁵、自慢げにいう。このドイツ語を訳しながら、彼の台詞のその後も見てみよう。

その術 (Kunst) は長いが、短いのは私たちの (unser) 人生です。
批判的研究に力を尽くしていても、560
よく頭や胸が不安でいっぱいになるのです。
その根源にたどり着く手段 (Mittel) を手に入れることは
なんと難しいことかと、つくづく思います。
その半ばに辿りつくまえにでも、
人間という哀れなやつは死ぬ運命にあるのですから。565

あの「芸術」と訳された ›Kunst‹ は、ここでは主体が対象に働きかける「技術」のことを表している。これは人々を弁舌さわやかに説き伏せる「術」であり、文献を対象として批判的に研究して、医学の根源に迫ろうとする「手段」である。この言葉は古代ギリシア語 < τέχνη > のドイツ語訳で、Riemer の辞書では「方法」(Art)、「技術」(Kunst)、「手職」(Handwerk)、「器用さ」(Geschicklichkeit)、「欺瞞」(Betrug)、「芸術作品」(Kunstwerk)とあり、Benseler の辞書では「学問」(Wissenschaft)、「文芸」(Dichtkunst)の意味まで加えている。こうしてみると、元来の自然などの対象に働きかける「手段・方法」が学や芸の「術」となり、それにより得られたものが職人の「作品」や「学問」、「芸術作品」にまで拡大されてきたことになる。「弁論術」も「人を操縦する器用な説得術」に変化し、「欺瞞」に堕することも多い。

以上を踏まえて、あの台詞をみると、この助手ヴァーグナはラテン語の言葉を少し加工し、「人生」の前に定冠詞ではなく「私たちの」(unser)という人称形容詞をつけ、人間一般ではなく「私とあなたの」という複数形で特殊化しているのに気づこう。ラテン語のこの言葉を知っていることで自分を先生の水準にまで高めてしまったわけである。ところが自分の医「術」研究の話になると、その「手段」を入手する道半ばにも到達していない自分に気づき、「哀れなやつ」(ein armer Teufel、これは単数形で「一人のあわれな悪魔」と自己卑下している。このアップ・ダウンの激しさは若者らしくもあり、未熟でもある。さらに彼は、世間から権威とあがめられながらも自分の到達段階に絶望している博士を前にして、批判的研究で過去からどれほど医学が素晴らしく進歩してきたかを知ることほど「喜ばしいことはありません」(570)と、現在の水準に満足している。この二人の対称は興味深いが、ここで重要なのは、「いのち短い」³⁶ 私が永遠に残る究極で静的なものとして解した「芸術作品」、その ›Kunst‹ がここでは究極の医に迫る手

段・術として使われ、しかも医学も過去から発展してきた動的なものとして捉えられていることである。そして、医学の真髄に到達しようと過去の文献をまさぐり、現在の技「術」水準に満足しているヴァーグナが一方の極に、色々な「術」を考案して試してみたが、黒死病で患者がバタバタ死んでいくのを見ているしかなかったファウスト (981ff.) が他方の極にいる。このどちらが現代の私たちに魅力的であろうか。青カビからペニシリンを作り、これですべての病が治せる、自然を支配した、そう思い込んでいた人間を抗生物質にたいする耐性を獲得した菌が襲い、しかもそれが病院で流行している、この現実を見れば明らかであろう。もちろん、その現実を前にして、未来に向かって人間は努力するしかないが。

閑話休題。前で触れたように、この言葉はラテン語の《*vita brevis, ars longa*》に由来する。古代ローマのセネカ (L. Annaeus Seneca BC. 4-AD. 65) は『人生の短さについて』(■*De brevitae vitae*■) で引用符つきでこう書き、ピリオッドで止めている。

《*vitam brevem esse, longam artem.*》

「人生は短く、長いは学術。」

そしてこう続ける。「我らは乏しい時間しかないのではなく、それをむだに使っているのだらう。我らが人生は十分長く、もしそれがまとめてうまく用いられるなら、偉大な行為を完成するにたっぴりな期間が定められているのだ」³⁷。これは明らかにその引用を受けてつけた、彼の教訓的な解釈である。これから、英語の〈be〉動詞に当たる〈sum〉の不定法〈esse〉が省かれ、あのような形で「人生は短く、学術は長い」と簡略化され、ゲーテの時代に伝わった。日本の教科書に現れたあの言葉はこのセネカから来ているのだらうが、これを「芸術」と限定されると、日本人の多くは私と同じく、あのように解釈しないだらうか。ゲーテとセネカは少し違う意味で使っているが、両者とも「究極のものに到達するには、個人としての人間の命はあまりにも短い」という意味では同じである。ちなみにラテン語の〈*artem*〉、〈*ars*〉は英語の〈*art*〉(芸術、技術)で、ドイツ語ではこの英語と同じ〈*Art*〉は「仕方、方法」という意味で、「芸術、技術」は〈*Kunst*〉である。

あのセネカの引用原典は500年ほど前のヒッポクラテス (Hippokrates BC. 460頃-BC. 375.) である。このギリシア人は『箴言』第1章第1節をこう始めている。

$\begin{array}{ccccccc} \text{ホ} & \text{ビオス} & \text{ブラキユス} & \text{ヘーデ} & \text{テクネー} & \text{マクレー} & \\ \text{I} & \text{S} & \text{S} & & \mu & & \end{array},$
 命は短い、医術は長い³⁸、

彼は前文を接続詞〈 〉で受け、さらにこの文をコンマで止め、こう続けている。この一節を最後まで『世界の名著9、ギリシアの科学』の訳で引用してみよう。

生命は短く、学術は永い。好機は過ぎ去りやすく、経験は過ち多く、決断は困難である。
医師はみずから自己の勤めを果たすだけでなく、患者にも看護者にも、また環境にも協力させる用意がなくてはならない³⁹。

ヴァーグナとファウスト、そして同じくヒポクラテスも医者であるが、同じような言葉でも随分意味が違ふようだ⁴⁰。これを以下途中までこれについての「解説書」⁴¹にのっとって説明するが、上に引用した訳語と違ふものは拙訳であることをまず断っておきたい。ゲーテのとは前後が逆になっているが、同じように主体が働きかける対象は最初に置かれている。ヒポクラテスの場合それは「生命」で、その持ち主は患者となる。それに対応する「学術」は目の前の患者に臨床医ヒポクラテスが施す「医術」である。長短の概念は相対的なもので、ここでは前者が「短く」、後者が「長い」ということは、医術を施している間に患者が亡くなったということになる。この文はギリシア語の原文では終止符ではなく、コンマで次の文に続き、そして〈 〉(なぜなら)という接続詞で前の文が受けられ、医術を施す「好機」()は逸しやすく、医術の「試み」()は間違いが多く、失敗後の「評価」()も難しいからだ。これ以後の解説は、もう必要ないであろう。彼は治療中の患者を亡くしたことを悔やみ、これまでの失敗から得た彼の知識と経験を弟子たちに受け継いでもらおうと、『箴言』の冒頭をそう始めたのである。

これで、私のも含め主に三様の解釈があることになるが、前項のあの言葉と同様に、戦中ではどのような解釈が国家から押しつけられていたのであろうか。次項でとりあげるゲーテの言葉「死して、成れ」も「(お国のために)死して、(靖国神社で神に)成れ」(?)と解されかねなかった時代に、戦地に赴く青年たちを前に「この戦争はやがて終わる。故に命を無駄にするな」⁴²と訓令した市丸利之助司令のような教養人が、映画にだけでなく、実際にいたのだろうか。

「一粒の麦」と「死して、成れ」

「一粒の麦死なずんば……」という言葉も、部分だけ取りだせば、逆の意味になる。例えば夫を事故で失い後追い自殺もしかねない若いお母さんを、「<一粒の麦>のように、残された三人のお子さんのために頑張ってください」と励ますのは人道的で、良い。しかし、その若いお母さんに多額の保険金がかけてあったら、どうだろうか。この言葉は「ヨハネの福音書」第 12 章 24 節にあり、イエスが弟子たちに喩えて教えた言葉であるが、日本では次の引用で示すように()内を省いたものが、先の「健全なる精神は……」のように使われているようである。

一粒の麦が(土のなかに落ち、そして)死ぬことがなかったら(、一粒のままである。だが死ねば、)多くの実を結ぶ⁴³。

この全体をあの若いお母さんが知っていたら、あの人道的な励ましはどうなるであろうか。『そうね、女の細腕で育てるより、保険金のほうがこの子たちにとって良いかもしれない』と考えられたら、逆効果である。イエスが一粒の麦に喩えた教えは、弟子たちの各々がこれまでの地上での生と決別し、新しい永遠の命に生まれ変わり、多くの人々を救えるようになれという要求である。そして、この「一粒の麦」はイエス自身のことも暗示している。彼は十字架の上で自らに課せられた人類救済の任を果たす（多くの実を結ぶ）ために死に、弟子たちの前に復活し、自分が本当に神の子であったことを示し、父なる神のもとに帰った。

この言葉に触発されたのだろうか、ゲーテ (Johann Wolfgang Goethe 1749-1832) は『西東詩集』(„West-östlicher Divan“ 1819) のなかに収められた「至福なあこがれ」(> Selige Sehnsucht<) で、「死して、なれ」(> Stirb und werde!<) とうたった。これだけでは「死んで、土に帰れ、または早く仏になれ」と解される恐れが現代ではある。それゆえ、ここで詩全体を拙訳で紹介し、後に解釈をくわえたい。

だれにも言わず、賢人 (den Weisen) だけにとどめてくれ。 1
多くのやからは嘲り笑い、それだけだから。
私がたたえるのは、炎の死 (Flammentod) に
あこがれる生 (das Lebend'ge)。

夜な夜なの愛、その後にくる冷氣 (Kühlung), 5
これがおまえを生むのか、おまえが生むのか、
静かにローソクが光を放つ (leuchtet) とき、
異様な (fremde) 感じが (Fühlung), おまえを襲う。

暗き (Finsternis) 陰、それに抱かれて、
むだに過ごすな、お前の命を。 10
新しきのぞみ (Verlangen) を胸に、おまえ自身を
より高き交わり (höherer Begattung) へと引き上げる。

はるかなる道程などは、なんのその、
光 (Licht) 求めて、憑かれたように、
飛びきたり、そして最後に、 15
蛾よ、おまえは焼け落ちるのだ (verbrannt)。

おまえよ、これが分からないのなら、
「死して、成れ！」という、この言葉が。

それではこの暗き (dunkler) 地上で
お前はうつろな (trüber) 客のままだ⁴⁴.

20

この詩のタイトルでは「至福の」(selige) という宗教的なおいの言葉が使われ、夜毎に営まれる「愛」(拙訳で第 5 詩行、原詩で第 5 詩行——以下この順序で数字のみ記す) が扱われ、そして人間は「より高い交わり」(11, 12) を目指して、飛んできて、炎に焼かれて落ちる「蛾」(15, 16) に喩えられ、「死して成れ」(18, 18) という命令を理解せよ、で終わる。このように詩全体がかもし出す雰囲気は異様である。

ゲーテはあの「一粒の麦」の喩えを意識して、この詩を書いている。12 人の弟子は隠喩で分かりやすく話されてもイエスが理解できなかった。ゲーテはこれを踏まえてか、嘲笑を浴びるのが落ちだから (2, 2), 「賢人」(1, 1) にだけこれを語ってくれと書き出している。この詩で彼がたたえるのは >das Lebend'ge< で、これは形容詞 >lebendig< (生きている) の名詞化で、個体が自らの生を維持し、さらにコピーを生みだすための根源的なものである。この「生」は日々繰り返されるものであるが、これに彼は、「炎の死にあこがれる」(3, 4) という「生」とは一見対立する限定をつけている。この限定付きの「生」が第 6 詩行の >dich, du< (おまえ) で受けられるが、まずその原文を見てみよう⁴⁵。

In der Liebesnächte Kühlung,
Die dich zeugte, wo du zeugtest,

5

まず文法を押さえておこう。第 6 詩行の関係代名詞 >die< の先行詞は >Kühlung< で、これが動詞 >zeugte< (生む) の主語、そして >zeugtest< の目的語となっている。そしてこの 2 つの動詞は直説法過去ではなく接続法第二式であろう。それで直訳すれば、「愛の夜な夜なの >Kühlung< のなかで、それがおまえを生んだのか、おまえがそれを生んだのか」となる。問題なのは、一応「冷氣」と訳しておいた >Kühlung< の意味である。ハンブルグ版の注には、「この言葉は >Kühle< (冷たさ) と関連がある。この >Kühle< は旧い体温学の影響を受け、18 世紀では時には >Fieber< (熱) の反対語で、>Erquickung< (元気の回復)、高熱状態からの解放の意味でとられる」⁴⁶ とある。これに従えば、あの「夜な夜な」の行為中は「高熱状態」で、その後に体温は下がり「元気の回復」となる。その行為後に来る虚脱状態を >kleiner Tod< (小さな死) というが、するとこれはあの >Flammentod< (炎の死) と繋がろう。しかし、それでも元気回復後はふたたび他の動物と同じ日常の繰り返しに帰るだけで、あの限定を受けない「生」の段階であろう。この繰り返されてきた「小さな死」の状態、突然神の啓示のように、これまでとは違った本来あるべき人間への「回帰」を促す「冷氣」と解すべきであろう。つまり、「このままの段階では他の動物と同じではないか」と、ふと気づくことである。こういう思いを起こさせるものが外から来て、あの「生」をおまえの内に生みだすのか、それともおまえ自身が内か

らそれを生むのか、どちらかは分からないが、という意味がああ2詩行ではないだろうか。そして、これが「異質な感じ」(>fremde Fühlung< 8, 7)と同じ脚韻を踏み、対応している。

こうしてみると、この詩全体の中で占める「死して、成れ」の意味の恐ろしい衝撃が理解できよう。読者は第3から15詩行まで、「おまえ」と呼びかけられていたのは人間である自分のことだと思いこみ、読み進めてきたが、次の第16詩行で突然それが「蛾」であったことを知り、冷や水を浴びさせられる。そして、あゝの「一粒の麦」の喩えがゲーテの肉声で続く。この言葉が分からないのなら、この暗き地上で「うつろな」まま去って行く「客」として、「蛾死」することになるぞ、と。

「暗い」(dunkel)の反対語が「明るい」(hell)に対して、「うつろな」(20, 19)と訳した原語 >trübe< (濁った)の反対語は >klar< (澄んだ)である。例えば、洞穴が「暗い」のは光が差し込まず「明るくない」からであるが、光が十分あっても眼のレンズが「濁って」いれば、「これこそ光だ」と突っ込んだ先が「ローソクの炎」であったりする。それゆえ、その濁りを取り去らず、しっかりしない精神で「うつろな」ままにいる人間にその責任がある。「死して、成れ」、この言葉を理解すれば、暗い地上にある権威、教会や国家がこれまで神の名において人間をどれほど戦火の中に投じてきたか分かるだろう。この詩を読んで、「蛾から、人間に成った」おまえは今後自ら「新生」を続け、自らの「濁り」を落とし、「澄んだ」客として逝かなければならぬ。

これはもちろん私の自由な解釈(翻訳)である。しかし、これであながち間違っていないような気がする。というのは、ゲーテが東のイスラム文化に興味を持ち、西のキリスト文化と止揚しようと、この『詩集』に「西東」を冠していること、これが第一点で、次にこの詩の第1詩行が「賢人(den Weisen)にだけ言ってくれ」で始まり、ユダヤ教も加えた3宗教を止揚しようとレッシング(Gotthold Ephraim Lessing 1729-1781)が書いた戯曲のタイトルが、同じ『賢人ナータン』(„Nathan der Weise“ 1779)であること、以上の二点を考慮すると、そう解釈できるのではないだろうか。この十字軍時代のエルサレムを舞台にした第3幕7場ではその宗教が指輪に喩えられ、こう判決が下る。3つの宗教(指輪)の本質(力)がそれを信ずる人を「神と人に愛されるようにする」ものであるなら、自らの偏見(濁り)を取り去って、そうなるように各自努力しなさい⁴⁷。

一人歩きしている部分は原文に戻して、全体の中で今一度吟味し直さなければならない、これがこの項の結論である。

マルクスの誤校正

これまでの一部が全体から分離・独立させられたところから生まれる誤解・曲解と違って、ここでは原文そのものに間違いがある例を扱いたい。新聞や雑誌などには誤植がよく散見されるが、これは締め切りぎりぎりまで原稿を仕上げるのが常態化している特殊な発行情形によるもので、

万国共通といえよう。ある新聞記事で ›aus aller Herren Länder‹ という複数 3 格の名詞に ›n‹ がつけられていない誤植を見つけ、ブランド教授に指摘したら、彼は辞書を持ちだし ›aus aller Herren Länder(n)‹ という記述を示された。「文法的にはおまえが正しいが、みんなが間違いを思いだすと例外として認められ、そのうちに文法そのものも変化してしまう」と言われ、同じゲルマン人の言語がドイツ語と英語に分化した長い歴史を私は思い浮かべた。日本にも誤用が公認されてしまうものがある。「懸命」の前につく「一^{いっしょ}所」が類似音の「一^{いっしょう}生」と誤用される例もそうであるが、漢字は表意文字であるため、「一生懸命きみを愛すから、結婚してくれ」はまだ良いとして⁴⁸、「一生懸命わたしは勉強して、4 年間で卒業します」では文意が矛盾し、意味をなさない。この例を逆に日本語を勉強する外国人に指摘されたら、どう答えるのだろうか。

このように疑いの目でテキストを読まなければならないことに気づかせてくれたのは、「ぼくはドイツ語を教えるから、君たちは経済学を教えてくれ」と、学生と始めた『資本論』⁴⁹ 自主ゼミであった。中高時代、教科書は正しく、それなりに分かりながらであるが、おもに暗記の対象であった。大学で読まれる古典は世界史上の大先生が人類に遺したもので、内容の点では「なるほど」と感心したり、「そうは思えないが、そういう見方もあるのか」と、著者と対話しながら読むという批判的な精神は成長させつつではあったが、テキストの原文が間違っているとは考えもしなかった。ましてや専門外の分野では、それが理解できなくても、それは自分の日本語も含めた語学力と知識の不足、または考え方がおかしいからだと思っていた。その自主ゼミでは学生が音読すると、私は発音を直す、彼らが訳すと、こちらは文法的質問をする、そして内容についての自由な意見交換という形で進めていった。ある日、その訳と文法が相容れない箇所が出てきた。そこで徹底的に議論し、では原文が間違っているという結論になった。この内容については後述するとして、その間違いを出版社に問い合わせようと学生が書いた手紙を少し直し、投函させた。「間違っていない」という最初の返書に、出版社に誤植と理解させるようさらに詳しく説明した手紙を出させると、それにたいする第二の返書が届いた。その拙訳が以下である⁵⁰。
(現物は図 3 として 61-62 頁に)

私たちはあなたの第二の手紙をいただき感謝しています。私たちは決定的に解明しようと、マルクス・エンゲルス著作集版の編集発行者、マルクス・レーニン主義研究所に、1867 年以来の最も重要な『資本論』版の該当テキスト箇所の変転を調査するよう依頼しました。以下がその結果です、

初版 (1867 年, 5 頁) でマルクスは正しく ■notwendige■ と書きました。しかし 1872 年の第 2 版 (14 頁) で彼は間違えて ■notwendigen■ と校正してしまいました。エンゲルスは 1883 年の第 3 版 (6 頁) でも、—— この印刷はマルクスによって準備されたのですが——、そして 1890 年の第 4 版 (6 頁) でもそれをそのままにしました。カウツキーによる、1914 年シュトゥットガルト、『資本論』第 1 巻の版では、エンゲルスに従って、同様に ■notwendigen■ と書かれています。最初にこの「歴史的な」誤りを訂正したのは、1932 年モス

クワにあるマルクス・エンゲルス・レーニン主義研究所版の『資本論』(44 頁)です。1947 年以来この版に基づくディーツ出版社の『資本論』版はそれに従っています。『マルクス・エンゲルス著作集』の第 23 巻である『資本論』の第 1 巻の版(そしてそれとテキストが同一である青表紙の単行本の『資本論』)は 1962 年の初版から誤って **■notwendigen■** と書かれています。これについては明らかに次のようにしか説明できないようです。すなわち、第 23 巻のテキスト作成ではエンゲルスの 1890 年の第 4 版が元になっていた、と。そのさい 1890 年以来多数の出版部数と後の版にまぎれ込んだ多数の誤りは校正されました。しかしこのエンゲルスが最後の手を入れたテキストに忠実であったため、残念なことに、そのような誤りまで引き継いでしまいました。

さて、1872 年以来『資本論』第 1 巻の最も重要な版がドイツ語を話す人たち——マルクスとエンゲルスも含めて——によって出版されたのに、誤って **■notwendigen■** と書かれている、それに対してそのテキストの箇所の訂正が外国から来たということ、これにはどうしてもある種の笑いがこみ上げてまいります。

あなたの指摘はマルクス・エンゲルス全集(MEGA)の編纂にとっても重要です。私たちはそれを第 2 部の該当する巻で考慮させていただくつもりです。

これで質問にたいするお答えになったかと思いながら、私たちにも新しい認識をもたらしていただいたあなたの指摘に、最後にもう一度感謝の意を表させていただきます。

私たちが期待していたのは「あなたがたの指摘のとおり」だけで良かったが、このような詳細をきわめた調査報告の手紙に感激すると同時に、ドイツ的徹底性の伝統が受け継がれていることを感じた。この返信内容から、この項で扱う必要な要点をまとめると、1. マルクス(Karl Heinrich Marx 1818-1883)は 1867 年の初版では正しく **>notwendige<** と書き、1872 年の第 2 版で間違えて **>notwendigen<** と校正し、2. エンゲルス(Friedrich Engels 1820-1895)はマルクスの死後 1890 年の第 4 版でその誤りを受け継いでしまい、3. その後紛れこんだ多くの誤植を排除しようと、1962 年のディーツ版『マルクス・エンゲルス・作品集』第 23 巻はその第 4 版をもとに出版したが、その誤りも受け継いでしまった、以上この 3 点になる。すると、問題とすべきは第 4 版の 6 頁、そして私たちが利用したディーツ版の第 23 巻の第 54 頁となる。前者は入手が困難であろうから、この頁全体をと要求されるかたのため、63 頁に図 4 として掲載する。この本文では 2 つの版から、問題となるそれぞれの 1 文だけを等倍の写真版で再現する⁵¹。

Der Werth einer Waare ver-
hält sich zum Werth jeder andren Waare, wie die zur Produktion
der einen nothwendigen Arbeitszeit zu der für die Produktion der
andren nothwendigen Arbeitszeit.

(第 4 版, 6 頁)

Der Wert einer
Ware verhält sich zum Wert jeder andren Ware wie die zur Produktion
der einen notwendigen Arbeitszeit zu der für die Produktion der andren
notwendigen Arbeitszeit.

(ドイツ版 第 23 巻 54 頁)

問題の >notwendigen< には便宜上下線をつけたが、ここで確認しておいてほしいことは両版ともすぐ下に同じものがあり、特に第 4 版ではそれがさらに接近して重なっていることである。

では学生たちと議論した内容を再現しよう。学生の訳を正確には再現できないので、彼らが原文とは違った正しい訳をしたのは、すでにマルクスの労働価値説を学んでいたため、逆にその内容から間違っている原文を読んでしまったと推察し、ここでは岩波文庫から引用する⁵²。

ある商品の価値の他の商品のそれぞれの価値にたいする比は、ちょうどその商品の生産に必要な労働時間の、他の商品の生産に必要な労働時間にたいする比に等しい。

確かこれに近い訳だったと思うが、こちらはさっぱり理解できなかった。そのためドイツ語の文法に従って確認していくことになる。>sich zu et³. wie ~verhalten< (あるものにたいする関係は、~の場合と同じである) の構文をきちんと把握していることを確かめ、「この語は何格か」などという質問攻めに彼らは一部を除いて正確に答えてくれた。「その一部のため、きみの訳は間違った。その箇所 >die zur Produktion der einen notwendigen Arbeitszeit< の君の訳『その商品の生産に必要な労働時間の』は間違いで、『その他の必要な労働時間の生産のための商品』という訳になる」⁵³。学生のほうは「先生、それでは全体の意味がおかしくなります」と色々説明をしてくれる。結局、「では、原文が間違っていることになる。きみたちの訳のようになるには、そこは >notwendige< でなければならない」ということで、前述したような手紙の交換へと発展した。

ドイツ語のできる読者には、これでお分かりだと思う。それにしても、あの日本語訳は専門外の私には分かりにくかった。訂正したドイツ語で素直に読めば、こちらのほうが実に分かりやすい。もちろん前項の「木と森、または文法について」の第 2 例で述べたように、省略されているものを () 内に補い、さらに原文を正確な比例関係に直して、1 行目の >jeder andren Ware< を >andrer Ware< に替えて、

Der Wert einer Ware verhält sich zum Wert andrer Ware, wie (sich) die zur Produktion der einen (Ware) notwendige Arbeitszeit zu der für die Produktion der andren (Ware) notwendigen Arbeitszeit (verhält).

これを訳せば、「ある商品の価値と他の商品の価値との比は、一方の商品の生産に必要な労働時間と他方の商品生産に必要な労働時間との比と同じである」となる。その具体例を次のように考えれば、理解が早まる。一本 50 円の鉛筆と一冊 100 円のノートとの価値の比は 50 : 100 で、一本の鉛筆の生産に要する労働時間 2 分と一冊のノートの生産に要する労働時間 4 分の比は 2 : 4 で、その両者の比は 1 : 2 で、同じである。

最後に残った問題は、なぜマルクスは第 1 版で正しく *›notwendige‹* と書いたのに、次の版で *›notwendigen‹* と間違えた校正をしたのか、これである。あの返書の記述から、初版から第 4 版まで頁数は変わっていても、この段落面は同じであろう。そしてマルクスは初版本を利用して、再版の校正をしたと考えられる。これまで見てきたように、注 51 も含めて、正書法は歴史・地域的に色々あるが、ここでは形容詞の変化という文法が問題になっている。つまり、定冠詞が前にある形容詞は語尾を *›en‹* ではなく、*›e‹* と変化して女性単数 1 格の名詞を修飾するという現代文法である。マルクスはこの箇所と同じく長い冠飾句のある変化を図 4 (63 頁) の 2 行目から *›die zur Herstellung eines Gebrauchswerths gesellschaftlich nothwendige Arbeitszeit‹* と正しく書いている。それゆえ、この問題は彼の時代と現代の文法が変わったということではない。

上下で 2 つの *›notwendigen‹* が重なっていることは前述したが、まさにこれがあの誤校正を引き起こしたのではないだろうか。マルクスは最初の 1 格の *›notwendige‹* を正しいものと認め、そのままにした。そして次の 3 格の *›notwendigen‹* がある下の行に目を移したと思い込み、実は同じ上の行であったのに、そこに *›n‹* がついていないのに気づき、直し、再び目を移したときは、同じ *›Arbeitszeit‹* が下にもあるため、その次の *›Als Werthe……‹* (63 頁の図 4 参照) から校正を続けてしまった。これは私の推測でしかないが、どうだろう？

この項を終えるにあたって最後に、あの詳細な調査結果を知らせてくださったディーツ社の Leiter (社長?) ギュンター・ヘニツ博士に、私たちはお礼の手紙を書かなかったことへのお詫びをかねながら、その結果報告に続いて博士が漏らされた苦笑は必要のないものであったことを報告したい。私の友人ヘルムート教授に DDR がまだ存続していた 1980 年代の後半にこの誤植を告げたとき、彼は「資本論にも多くの誤り (Fehler) がある」と言った。彼はその内容はもちろん、文法的にも正しく読んでいたが、その間違いをわざわざ手紙にしなかったただけのことで、これは万国共通である。ドイツ語を母国語としていない専門外の外国人であったからこそ、私はその文法に従って一字一句、学生に経済学を教わりながら、丁寧に読んだためそれを発見しただけで、ドイツ人なら自分の頭でその先を正しく想像しながら字図を追うため、誤植があっても気づかず読み進めてしまうこともあるだろう。

それにしても今この手紙を読み返すと、この博士の苦笑は人間的な余裕からかもし出されるもので、共感できる。70 年代に DDR を訪れた友人から聞いたその雰囲気は、それに対応するものであったのだろうか、私がシラー研究のため、彼の名前を冠するイエーナ大学を訪れていた 80 年代の後半とは、ずいぶん空気が違うように思われる。今年の夏、この論文執筆で同市に滞在していたとき、この手紙を読みながら私の知人が「こんな厄介なことには、当時だれも係

われませんでしたよ」と、ため息をついた。マルクスはこの初版本への序言で「学問的ないかなる判断も歓迎する」⁵⁴と書き、自由な議論を呼びかけたが、その後神格化され、崇拝の対象にされてしまったのか。そして裏ではシュタージ (Stasi, Staatssicherheitsdienst「国家保安局」の日常語) が暗躍し、国民 (Volk) は親しい者たちの輪のなかで次のようなヴィッツを語っていた。

批判とは、妻がセロリーを皿に盛って、夫に「毎日これ食べて！」と差し出すこと。

自己批判とは、3日後、夫が「もっと沢山」と皿を出し、うなだれること⁵⁵。

日本ではマルクスは流行らなくなってしまったが、ヨーロッパでは「最も大きな影響を与えた思想家は？」という問に、詳しい数字は忘れたが、ダントツでマルクスの名が挙げられ、イエーナ大学の図書館には前々世紀のものは貴重であるため奥に保管されているが、開架ではMEGAなど色々な版の作品集が並べられている。レーニンは■Good bye■となったが、マルクス・エンゲルスの像は今でもベルリートの広場に立っている。フンボルト大学の入り口ではマルクスのフォイエルバッハに関する次のテーゼを今でも読むことができる。「哲学者たちは世界をさまざまに解釈してきたに過ぎない。だが (aber) 肝心なのはそれを変えることである」。ただし、それには注意書きがこう添えられている、元にはなかった〈aber〉を政権党のSEDが付け加えた。「肝心なのは、この実践だ」と強調し、「哲学」すなわち「知を愛し、自分の頭で考えること」を放棄してはならないだろう。

翻訳に際してもこれは同じであろう。翻訳は文法を含めた基本にのっとり、部分を全体から切り離さず、それを「自分の頭で解釈⁵⁶・理解し、著者との対話を楽しみながら」進めること、そしてそこから得られる新しい「知を愛し」、それを糧に自らを発展・成長させていくことだからである。

注

- 1 これはブラジルの数学者 Malba Tahan (1895-1974) が『アラビアン・ナイト』風に数学を親しませるために著したもの。日本では白揚社から本文の表題で 2001 年 10 月 15 日、越智典子訳で第 1 版第 1 刷が出ている。
- 2 この原語はもちろん「ターヘル・アナトミア」とは読めない。これについては、杉田玄白著『蘭学事始』岩波書店 1983 年 4 月 8 日発行のこれに、緒方富雄氏が注をつけられている。94 頁の 29・8 の注参照。
- 3 前掲書、30 頁。
- 4 前掲書、34 頁。
- 5 前掲書、35 頁。
- 6 前掲書、40 頁。
- 7 前掲書、22 頁。
- 8 〈zinnen〉のオランダ語と訳語「精神」はこの前掲書の本文と註に依る。その隣国のドイツ語に、こ

れとよく似た単語〈Sinnen〉(Sinnの複数3格形で、発音は「ジンネン」、意味は「感覚、感覚器官」など)が、動詞としてsinnen(発音は「ジンネン」、意味は「考え込む」)がある。

- 9 前掲書、38-39頁。なお本文中の()内は、この校註者緒方氏の註38・4(106頁)を利用させていただき、読者に分かりやすくするため執筆者が挿入した。
- 10 ゲーテの『ファウスト』第317詩行。原文は „Es irrt der Mensch, solang' er strebt.“ (Hamburger Ausg. B. 3. S. 18.)で、講義でこの言葉を例文として出し、そう訳したとき、一人の学生が「過ちを犯さないためには、努力しない方がよい」という意味ですかと質問した。この言葉を彼は日本の諺という「果報は寝て待て」と理解したわけである。これには他に「人間努力するかぎり迷うこともあるだろう」(大山定一訳、人文書院『ゲーテ全集』第2巻、15頁)など様々な訳があるが、あの学生の誤った解釈を許してしまう恐れが残る。これも後述するように、作品全体から部分を抜き出すと、とんでもない誤解を誘発するという良い例である。

ファウストは悪魔のメフィストーテレスが喩えた昆虫のキリギリス以下の段階に止まるのではなく、人間として最高の(神のような)ものになろうと努力しているのである。しかし人間であるかぎり、神のようにいつも正しい道を辿ることができず、時には邪道に迷い込み、過ちを犯してしまうが、それを反省し、さらなる飽く無き努力を続け、最後にその域に到達することができたと思い、死を受け入れるのである。

ドイツ語の〈streben〉はここでは、「ある所に至ろうと努力する」で、その「所」はこの言葉の中では明示されていないが、前後関係や作品全体からは明らかに、あの高みを指している。〈irren〉も「正しい道からそれる」となる。

あの学生も「努力して」自分の頭で考えたため誤解したが、「正しい理解に到達できた」と言えよう。問題なのは、その意味は良く分からないが「この言葉が試験に出るかもしれないから、とにかく覚えておこう」と黙っていた方である。

- 11 Karl Marx „Zur Kritik der politischen Ökonomie“ Erstes Heft. Dietz Verl. Berlin. 1965. S. 18.
- 12 『経済学批判』マルクス著、杉本俊朗訳、国民文庫、大月書店、1970年、新訳七刷発行、19頁。
- 13 Es gibt keine Landstraße für die Wissenschaft, und nur einigen haben Aussicht, ihre lichten Höhen zu erreichen, die die Mühe nicht scheuen, ihre steilen Pfade zu erklimmen. (Zitiert: „Marx Engels Werke“ Dietz Verl. Berlin 1969. B. 23. S. 31.) 拙訳、「学問に街道はなく、その険しい小道をよじ登る労を厭わぬものにだけ、明るい高きところに到達できる見込みがあるのだ」。
- 14 マルクスがこのドイツ語訳をつけたのか、または読者の便宜のため後に添えられたのかという疑問が残るが、ここでは詮索しないことにする。興味深いのは先述のヴァーリッヒで、〈Zweifel〉を〈zweifältiger Sinn〉と記述している点である。〈Sinn〉は〈Mut〉とほぼ同じ意味であるから、〈Zweifel〉だけで「二つの心」の意になり、そのため〈Mut〉は余分であるため脱落したことになる。しかし〈fel〉は〈zweifältiger〉の〈fal〉で、〈falten〉(折りたたむ)と同根と思われる〈-fältig〉(「～重の、～倍の」の意で形容詞化する語)の素で、「心」という意味はない。そうなったのは多分〈Zweifelmüt〉と長くなった合成語を簡略化する必要からであろうが、このような言葉の変遷は興味深い。
- 15 Dante Alighieri „Die Göttliche Komödie“ Übers. v. Hermann Gmelin. Philipp Reclam jun. Stuttgart 1951 u. 2001. S. 15.
- 16 Dante Alighieri „Die Göttliche Komödie“ Übert. v. Metrich. Hrsg. v. Walter Heichen. Verl. Weichert, Berlin. S. 18.
- 17 宮川實訳、青木書店、1951年初版、23頁。
- 18 向坂逸郎訳、マルクス・エンゲルス全集7、昭和43年、56頁。
- 19 『国語大辞典』小学館、昭和56年発行、614頁。
- 20 同上、901頁。
- 21 『漢和大辞典』藤堂明保編、学習研究社、昭和53年発行、463頁。
- 22 注21と同掲書、675頁。

- 23 『独和辞典』博友社，昭和 51 年第 15 刷発行。
- 24 ロベルト・シンチンゲル，山本明，南原実編『現代独和辞典』三修社，1978 年。
- 25 『ソフィーの世界』ヨースタイン・ゴルデル著，須田朗監修／池田香代子訳，日本放送出版会，1995 年 6 月 30 日第 1 刷発行，1995 年 7 月 27 日第 11 刷発行，36 頁。
- 26 同上，662 頁。
- 27 Jostein Gaarder „Sofies Welt“ Übers. aus dem Norwegischen v. Gabriele Haefs. Verl. Karl Hanser, 1993. S. 31.
- 28 「ゆとり教育」の善悪はその内容によって決まるのであって，その名によって行われた実際の内容を検討しなければならないだろう。
- ところでこのテスト結果をもとに，例えば朝日新聞（2004 年 12 月 7 日）は 15 位までの平均得点表を掲げ，韓国などに抜かれたことを記事の内容の中心にしているが，アメリカやドイツなどはそれ以下であるため除外されている。しかし両国の名がないのは，それに参加していなかったのではと読者に思わせてしまう恐れが残ろう。ドイツの週刊誌シュピーゲル（„Der Spiegel“ 2004 年第 50 号）には 40 位までのランキング表が載っている。数学では仏が 16，独 19，米 28 位，読解力ではその各国順で 17，21，18 位，自然科学では 13，18，22 位である。韓国では学歴で就職や結婚などの将来が決まってしまうため，教育熱が日本よりはるかに高いと他日報道されていたが，仏独米などの教育事情も紹介すべきだろう。
- 私はそれを特別に調べたことはないが，偶然知りえたものとして，こういうものがある。米では貧富の差が地域によって激しく，それが小学校段階の教育内容にまで影響し，ラテン語を学べる機会の有無がそこですでにでき，それが多くの学問用語となっているため，高等教育への道が貧困層の子どもには閉ざされがちである。ドイツでは高校まで半日教育で，下校後は地域社会に設けられているさまざまなサークルに所属し，そこでスポーツや演劇などを指導者のもとで上下級生とともに楽しむことができる。そのため学校には運動場などはないが，地域の文化的施設は日本よりはるかに整っている。ドイツでもそのテスト結果（2000 年の数学では前回の 20 から，当時の参加国中では今回 16 位に，同様に国語では 21 から 18 位に，自然では 20 から 15 位にとランクを上げたが）に衝撃を受け，全日制教育にすべきではないかという意見をドイツの新聞で読んだことがある。それにしても半日教育でその順位なら，なかなかのものと思うが，どうだろう。
- 29 „Die Jungfrau von Orleans“ in Schillers Werke, Nationalausgabe, Weimar 1948ff., B. 9. S. 257. 第 3 幕第 6 場，Versz. 2319.
- 30 『世界文学大系 18 シラー』野島正城訳，筑摩書房，昭和 34 年 11 月 10 日発行，390 頁。
- 31 『シラー名作集』石川實訳，白水社，1972 年 6 月 23 日発行，289 頁。
- 32 Walter Krämer u. Götz Trenkler, Verl. Eichborn, Frankfurt am Main S. 217.
- 33 „Lexikon der populären Irrtümer“ Eichhorn Verlag 1. Aufl. März 1996 und 9. September 1996. S. 217.
- 34 同上。
- 35 小西悟氏は次のドイツ文を，「少年老い易く，学成り難し」（朱熹）をも念頭において，「学なりがたく，命短しでございます」と訳し，これに「博識をてらって格言《Ars longa vita brevis》（学芸は長く，人生は短し）と丁寧な注をつけられている。（『ファウスト』大月書店，1999 年 5 月 10 日第 2 刷，28-9 頁，参照）。
- 36 これは黒澤監督の「生きる」で主人公が公園のブランコで口ずさむ歌詞を扱ったものである。なお，この映画はこの『ファウスト』を下敷きにしている。
- 37 Philipp Reclam jun. Stuttgart 2003. S. 4.
- 38 "Stephanus of Athens■ Commentary on Hippokrates' Aphorismus Selection - , Text and tanslate by Leendert G. Westerink. Akademie-Verlag - Berlin 1985. S. 32.)
- 39 『世界の名著 9. ギリシアの科学』田村松平編，中央公論社，昭和 49 年再版発行，215 頁。

- 40 ヴァーグナはセネカと同じ意味で使っているが、ファウストは患者の死を見ているしかなかった医学の研究に絶望している。そういうところから、彼はセネカ以来の意味とは違った、後述するヒッポクラテスの言葉の意味で受け取っているのかもしれない。この二人の違いは、後者が『箴言』を残したのにたいして、前者は絶望後メフィストーテレースと長旅に出され、ゲーテの『ファウスト』の主人公として残された。
- 41 注 39 の同書、281-300 頁を参照。
- 42 映画「硫黄島 戦場の郵便配達」での市丸役を演じた俳優の言葉。
- 43 „Biblia“ übers. von Martin Luther 1534. S. XXIX. からの拙訳。
- 44 „Goethes Werke“ Christian Wegner Verl. Hamburg 8. Aufl. 1967. B. 2. S. 18f.
- 45 ここを大山氏は「おまえがつくれ そしてまた おまえがつくる / すずしい夏の夜の愛のいとなみ」と訳されている。『ゲーテ全集 第 1 巻』小牧健夫、大山定一、国松孝行二、高橋義孝編、人文書院、昭和 43 年 9 月 30 日重版発行、322 頁、参照。
- 46 注 44 に同じ、S. 560.
- 47 „Gesammelte Werke“ Aufbau-Verl. Berlin u. Weimar. 1968. B. 2. S. 403ff.
- 48 生涯きみを愛することは約束しているが、きみ一所ではない。
- 49 Kark Marx „Das Kapital“ Dietz Verl. Berlin 1969 を私は使用。学生も発行年は違っても同じものだったと思われる。ちなみに、この初版は „Das Kapital Kritik der politischen Oekonomie“ hg. v. K. Marx, Otto Meissner Verl. Hamburg B. 1. は 1867; B. 2 と B. 3 は F. Engels がそれぞれ 1885 と 1894 年に発行。
- 50 こちらから出した 2 通の手紙のコピーは、清書して投函した学生がとっていればともかく、こちらには存在しない。最初に受け取った返書は行方不明で、同じ運命をたどっていたこの第 2 の返書は偶然数年前に見つかった。これは図 3 として 61-62 頁に掲載。
- 51 ここで他の版の調査結果をつけ加えておこう。下線は問題の箇所に、そして他に異なっている所に引用者がつけた。

》Der Wert einer Ware verhält sich zum Wert jeder andren Ware, wie die für die Produktion der einen notwendigen Arbeitszeit zu der für die Produktion der andren notwendigen Arbeitszeit.《 Zitiert aus „Karl Marx - Das Kapital 1.“ Ullstein Buch Nr. 2806. Verl. Ullstein GmbH, Frankfurt/M - Berlin - Wien, 3. Auf. 1969. Augsburg Druck- und Verlagshaus GmbH. S. 32.

》Der Wert einer Ware verhält sich zum Wert jeder anderen Ware wie die zur Produktion der einen notwendige Arbeitszeit zu der für die Produktion der anderen notwendigen Arbeitszeit.《 Vgl., „Marx Werke“ Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt. B. . S. 9. この版では問題の箇所は正しい。>andren< が >anderen< に替えられ、他の版の正書法とは異なっている。

》Der Werth einer Waare verhält sich zum Werth jeder andern Waare, wie die zur Produktion der einen nothwendige Arbeitszeit zu der für die Produktion der andern nothwendigen Arbeitszeit.《 Zitiert aus Mega, B. Abt. 5., Verl. Dietz Berlin 1983. S. 20. この Mega 版ではあの手紙で約束された訂正がされている。正書法は第 4 版のものに戻され、>andren< が >andern< に替えられている。上下が重なっていた >nothwendigen< の二番目は次頁に送られて、最初のそれとはこの頁配置の変更により上下で重なることはなくなった。

》Der Wert einer Ware verhält sich zum Wert jeder anderen Ware wie die zur Produktion der einen notwendige Arbeitszeit zu der für die Produktion der anderen notwendigen Arbeitszeit.《 Zitiert aus „Karl Marx - Das Kapital 1.“ Dietz Verl. Berlin 1947, 1962, 1983. S. 54. あの返信によれば、これは 1932 年にモスクワからの指摘を受け、訂正された 1747 年版の重版であるが、裏表紙には 》Diese Separatausgabe ist identisch mit Band 23 der Werke von Marx und Engels《 (これはマルクス・エンゲルス・著作集第 23 巻と同一の分離版である) と記されているが、こちらの訂正が実際は第 23 巻には運動しなかった。これは当時の社内体制が縦割り運営だったからなのか、たんに連絡が不十分だった

からなのか？

- 52 『資本論 1. エンゲルス編』向坂逸郎訳，昭和 44 年 1 月 16 日第 1 刷，同 45 年 10 月 10 日第 4 刷発行，75 頁．
- 53 もちろん原文とおり読んで，内容の点から少し考えれば，「労働時間の生産」など不可能であるから，おかしいことに気づくが，一人だけの場合は読み飛ばしてしまうか，「その説明はそのうち出てくるだろう」と先に進むうちに忘れてしまいがちである．読書会というものはそれを防いでくれる最高の形態であろう．後述するように，学生の読み方は ›der einen‹ の次に ›Ware‹ を補って「一方の商品の」と読み，その 2 格を前の ›Produktion‹ にかけ，「その生産のために必要な労働時間は」と，女性単数名詞 ›Arbeitszeit‹ も，それにかかる形容詞も ›notwendigen‹ も 1 格で読んでいる．しかしそうなるためには ›notwendige‹ でなければならない．原文のままでは ›notwendigen‹ は ›einen‹ と同じ変化語尾であるため，共に 2 格の形容詞として次の名詞を修飾し，あのようなおかしい内容の訳になる．
- 54 „Marx Engels Werke“ Dietz Verl. Berlin 1969, B. 23. S. 17.
- 55 セロリーには強壮作用があるとのこと．
- 56 「訳す」には「古語・漢語による文章を現代語による文章に直す．解釈する」の意がある．（『国語大辞典』小学館，昭和 56 年 12 月 10 日第 1 版第 1 刷発行，2365 頁参照）．この「解釈する」ことの重要性は，誤訳のもととなる機械的作業に従事する場合はともかく，外国語を翻訳する場合にも当てはまるう．

DIETZ VERLAG BERLIN



VERLAGSLEITUNG

TRÄGER DES KARL-MARK-ORDENS
UND DES VATERLÄNDISCHEN VERDIENSTORDENS IN GOLD

Dietz Verlag, 102 Berlin, Wallstr. 76-79, Postfach 186

Herrn
Tetsuya Esaka
Nihon - Fukushi - Universität
31 Takikawatyo Showaku Nagoyashi

Japan

Ihre Zeichen

Ihre Nachricht vom

Unser Zeichen
Be/Hs

Berlin

20. 8.1979

Betreff Karl Marx : Das Kapital • Erster Band

Sehr geehrter Herr Esaka!

Wir haben Ihren zweiten Brief dankend erhalten. Um zu einer endgültigen Klärung zu kommen, haben wir die Herausgeber der Marx/Engels-Werkausgabe, das Institut für Marxismus-Leninismus, gebeten, die Entwicklung der betreffenden Textstelle in den wichtigsten "Kapital"-Ausgaben seit 1867 zu untersuchen. Hier das Ergebnis:

In der Erstausgabe (1867, S. 5) schrieb Marx richtig "nothwendige". Aber in der zweiten Auflage von 1872 (S. 14) korrigierte er fälschlich in "notwendigen". So hat es Engels sowohl in der dritten Auflage von 1883 (S. 6), deren Druck noch von Marx vorbereitet worden war, als auch in der vierten Auflage von 1890 (S. 6) stehen gelassen. In der Ausgabe des ersten Bandes des "Kapitals" von Kautsky, Stuttgart 1914, heißt es ebenfalls, Engels folgend, "notwendigen". Zum erstenmal korrigiert diesen "historischen" Irrtum die "Kapital"-Ausgabe des Marx-Engels-Lenin-Instituts Moskau von 1932 (S. 44). Dem folgen die auf dieser Ausgabe fußenden "Kapital"-Ausgaben des Dietz Verlages seit 1947. Die Ausgabe des ersten Bandes des "Kapitals" im Band 23 der "Marx-Engels-Werke" (und in der ihr textlich identischen blauen Einzelausgabe des "Kapitals") schreibt seit der ersten Auflage von 1962 fälschlich "notwendigen". Das ist ganz offensichtlich nur so zu erklären: Grundlage für die Textdarbietung im Band 23 war die 4. Auflage (1890) von Engels. Dabei wurde eine große Zahl von Fehlern korrigiert, die sich seit 1890 in die zahlreichen Nachauflagen und -ausgaben eingeschlichen hatten. Daß die Treue zum Engelstext letzter Hand allerdings bis zur Übernahme eines solchen Fehlers ging, ist bedauerlich.

Nun, immerhin entbehrt es nicht einer gewissen Komik, daß die wichtigsten Ausgaben des ersten Bandes des "Kapitals" seit 1872, die von Deutschsprechenden - Marx und Engels eingeschlossen - herausgegeben wurden, fälschlich "notwendigen" schreiben, während

20. 408.17.69 III.21 x 9697

Telefon
2 700 05

Telegraphisch
T 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1

Bankkonto: Berliner Stadtkonto
100 Berlin, Behrenstr. 35-39
Konto Nr. 0531-19417

Postcheck:
Berlin Konto Nr. 43343

Telegramm:
Dietzverlag Berlin

BN 9013127 8

- 2 -

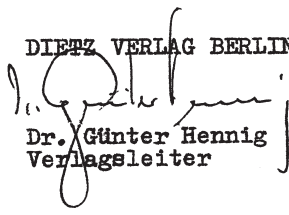
die Berichtigungen der Textstellen aus dem Ausland kamen:
das erste Mal von Moskau und das zweite Mal aus Japan!

Ihr Hinweis ist auch für die Edition der Marx-Engels-Gesamt-
ausgabe (MEGA) wichtig. Wir werden ihn in den betreffenden
Bänden der Zweiten Abteilung berücksichtigen.

Wir hoffen, daß damit die Frage geklärt ist, und bedanken uns
nochmals für Ihren Hinweis, der auch uns neue Erkenntnisse
brachte.

Mit freundlichen Grüßen

DIETZ VERLAG BERLIN



Dr. Günter Hennig
Verlagsleiter

☒ 3 - 2

Es ist also nur das Quantum gesellschaftlich nothwendiger Arbeit oder die zur Herstellung eines Gebrauchswerths gesellschaftlich nothwendige Arbeitszeit, welche seine Werthgrösse bestimmt⁹⁾. Die einzelne Waare gilt hier überhaupt als Durchschnittsexemplar ihrer Art¹⁰⁾. Waaren, worin gleich grosse Arbeitsquanta enthalten sind, oder die in derselben Arbeitszeit hergestellt werden können, haben daher dieselbe Werthgrösse. Der Werth einer Waare verhält sich zum Werth jeder andren Waare, wie die zur Produktion der einen nothwendigen Arbeitszeit zu der für die Produktion der andren nothwendigen Arbeitszeit. „Als Werthe sind alle Waaren nur bestimmte Masse festgeronnener Arbeitszeit“¹¹⁾.

Die Werthgrösse einer Waare bliebe daher konstant, wäre die zu ihrer Produktion erheischte Arbeitszeit konstant. Letztere wechselt aber mit jedem Wechsel in der Produktivkraft der Arbeit. Die Produktivkraft der Arbeit ist durch mannigfache Umstände bestimmt, unter anderen durch den Durchschnittsgrad des Geschickes der Arbeiter, die Entwicklungsstufe der Wissenschaft und ihrer technologischen Anwendbarkeit, die gesellschaftliche Kombination des Produktionsprocesses, den Umfang und die Wirkungsfähigkeit der Produktionsmittel, und durch Naturverhältnisse. Dasselbe Quantum Arbeit stellt sich z. B. mit günstiger Jahreszeit in 8 Bushel Weizen dar, mit ungünstiger in nur 4. Dasselbe Quantum Arbeit liefert mehr Metalle in reichhaltigen, als in armen Minen u. s. w. Diamanten kommen selten in der Erdrinde vor und ihre Findung kostet daher im Durchschnitt viel Arbeitszeit. Folglich stellen sie in wenig Volumen viel Arbeit dar. Jacob bezweifelt, dass Gold jemals seinen vollen Werth bezahlt hat. Noch mehr gilt dies vom Diamant. Nach Eschwege hatte 1823 die achtzigjährige Gesammtausbeute der brasilischen Diamantgruben noch nicht den Preis des 1¹/₂jährigen Durchschnittsprodukts der

⁹⁾ Note zur 2. Ausg. „The value of them (the necessaries of life) when they are exchanged the one for another, is regulated by the quantity of labour necessarily required, and commonly taken in producing them“. „Der Werth von Gebrauchsgegenständen, sobald sie gegen einander umgetauscht werden, ist bestimmt durch das Quantum der zu ihrer Production nothwendig erheischten und gewöhnlich angewandten Arbeit“. („Some Thoughts on the Interest of Money in general, and particularly in the Public Funds etc.“. London. p. 36.) Diese merkwürdige anonyme Schrift des vorigen Jahrhunderts trägt kein Datum. Es geht jedoch aus ihrem Inhalt hervor, dass sie unter Georg II., etwa 1739 oder 1740, erschienen ist.

¹⁰⁾ „Toutes les productions d'un même genre ne forment proprement qu'une masse, dont le prix se détermine en général et sans égard aux circonstances particulières“. (Le Trosne l. c. p. 893.)

¹¹⁾ K. Marx l. c. p. 6-